

# 英語の授業における意見・考えの表出を促す指導方法の研究

## — 思考分類に基づく活動を通して、 コミュニケーション能力の育成を目指す —

坂井 美智子

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

**【概要】**本研究は、高等学校外国語科の授業において、思考分類に基づく授業モデルを作成し、生徒の思考が刺激される過程や、生徒の「話すこと」に対する意識の変化を調査することで、思考分類に基づく指導の効果を明らかにすることを目的とする。そのために、情報を越えた思考を促す問いを中心にデザインした授業を3つの単元に渡って実践した。意見・考えの表出を見取るパフォーマンステスト、生徒の思考の流れを可視化するマインドマップ、「話すこと」に対する意識調査を分析した。その結果、生徒たちは話す活動において、意見・考えを述べることを重視するようになり、より活発な意見交換が行われるようになった。また、「話すこと」に対する苦手意識や不安感が軽減され、英語学習に対する積極的な姿勢が見られるようになった。

### I 研究の背景

外国語科の各科目において、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」という5つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することと、複数の領域を関連付けた統合的な言語活動とが重視されている。この5つの領域は、聞くこと、読むことというインプットの領域と、話すこと [やり取り]、話すこと [発表]、書くことというアウトプットの領域にわかれる。この2つの領域いずれについても、生徒のコミュニケーションを図る資質・能力を育成するためには、言語知識を身に付け、それを使用する機会を保障していかなければならない。石川県内の高等学校においては、新学習指導要領の実施以降、特に話すこと [やり取り] の指導と評価について研究が進められており、筆者の勤務校においても令和2年度に英語教育充実事業の推進校として「話すこと [やり取り]」についての効果的な指導と評価につ

いて取り組んで以降、話す活動を積極的に行ってきた。取り組みを通して見えてきたのは、意見・考えを述べることを求めても、題材に対して賛成か反対を述べるに留まり、その理由や根拠を述べることができない生徒が多いということであった。話す活動を実施した後の振り返りシートには、「教科書で覚えた表現をどう使えばいいかわからない」「言いたいことが思い浮かばない」という回答が多く、生徒の意見・考えの表出を促す指導が必要であると強く感じた。

### II 先行研究

生徒の意見・考えの表出を促すためには、パターン・プラクティスのような機械的操作や教科書の内容を基にした情報授受の活動のみに留まっていたは難しい。生徒の思考を刺激する授業デザインを考える必要がある。では、どのように生徒の思考を活性化させればよいのだろうか。

Waters(2006)は外国語として英語を学ぶ

際に求める思考のレベルを①Memory（記憶）、②Translation（情報交換）、③Interpretation（解釈）、④Application（応用）、⑤Analysis（分析）、⑥Synthesis（総合・創造）、⑦Evaluation（評価）の7種類に分類し、このうち①②を認知処理のレベルが低い「情報内思考」、③から⑦を認知処理レベルが高い「情報を越えた思考」としている（表1）。そして、事実・情報をやり取りする活動より、与えられた情報を生徒自身が分析・解釈する活動の方がより高度な認知レベルの思考を求め、生徒の知的レベルに合った活動が実現するとしている。大下（2014）は外国語学習の初級者は、不十分な言語知識が原因で心理的に幼稚な活動を余儀なくされ、フラストレーションを高める原因となっており、思考の要素を加えることで、学習者の発達段階に見合ったコミュニケーション活動を実現できるとしている。

表1 Waters（2006）思考の分類

思考レベル	具体的思考
情報内思考	①記憶（Memory）
	②情報交換（Translation）
情報を越えた思考	③解釈（Interpretation）
	④応用（Application）
	⑤分析（Analysis）
	⑥総合・創造（Synthesis）
	⑦評価（Evaluation）

### Ⅲ 本研究の目的

筆者が勤務する県立高校では、英語学習に対する苦手意識が強く、中学校で学ぶ語彙が十分に定着していない生徒が多い。そのような生徒であっても、題材への理解を深める活動の認知処理レベルを徐々に上げていくことで、意見・考えを伝える楽しさを感じることができるのではないかと考えた。

以上のことから本研究は、思考分類に基づく授業モデルを作成し、授業を通して生徒の思考が刺激される過程や生徒の話すことに対

する意識の変化を調査することで、思考分類に基づく指導の効果を明らかにすることを目的とする。

## Ⅳ 研究方法

### 1. 実践対象

県立高校普通科普通コース第1学年  
習熟度別クラス17名

### 2. 実践研究の期間

令和5年4月～11月

準備：4月、5月 生徒の実態把握

実践Ⅰ：6月 Lesson 2

Curry Travels Around the World

実践Ⅱ：7月 Lesson 3 School Uniforms

実践Ⅲ：10月 Lesson 5 Bailey the Facility Dog

（使用教科書：啓林館 LANDMARK Fit I）

### 3. 研究方法

#### （1）思考分類に基づく授業モデルの作成

Waters(2006)の思考分類に基づいて作成したワークシートを用いて授業を進める。各Lessonが3, 4つのPartからなっており、各Partに1枚のワークシートを作成する。生徒への問いやコミュニケーション活動の内容については、大下(2009)の認知処理レベル別分類(表2)を参考にし、問いの認知処理レベルが低いものから高いものへと移行するようにワークシートを作成する(図1)。生徒はワークシートに記された問いについて考え、口頭で質問し合った後、ロイロノートで答えを提出する。それを全体で共有することで、他の生徒の意見・考えや表現に触れる機会を持つ。生徒はクロムブックで単語を検索することはできるが、英文翻訳機能は使用しない。

表2 大下邦幸(2009)思考を促す工夫の認知処理レベル別分類

思考レベル	具体的思考	思考を促す工夫
情報を越えた思考	③解釈	比較する、類型化する、関連性を見つける、まとめる
	④応用	予想(予測)する
	⑤分析	分析する、理由を見つける
	⑥総合・創造	自分と関連付ける、想像する、提案する
	⑦評価	判断する、葛藤する、評価する、印象や感想を言う

図 1 Lesson2 ワークシート



Part の授業展開と問いの例を表 3 に示す。導入として、題材に関連した話題で簡単なやり取りをした後、本文を聞き、情報内思考を促す問いに答える。その後、語彙の確認、本文の内容を確認した上で情報内思考を促す問いや認知処理レベルの低い情報外思考を求める問いに答える。最後に、認知処理レベルの高い問いに答える活動に取り組む。単元の最後にパフォーマンス課題に取り組み、問いに対して自分の意見・考えを述べる。

表 3 Lesson2 Part4 の展開と問いの例

導入	教師や生徒同士でやり取りをする What is your favorite curry dish?
リスニング	本文の内容を聞く
情報内思考	●True or False (3問) ●選択肢のある問い (3問) Where are the curry roux and curry in a pouch popular? a. Argentina b. Cuba c. North Korea d. The US
語彙・フレーズ	新出語句の意味を推測し、使用されている文法を確認する。
情報内思考	●教科書の内容に関する問い (3問) What did Japanese people invent?
情報を超えた思考 認知処理レベル低	●題材に関連した問い (2問) What Japanese dishes do you think would be popular in other countries? (応用) Why do you think curry in a pouch became so popular? (分析)
情報を超えた思考 認知処理レベル高	●題材に関連した問い (1問) You are going to sell food at a school festival. You have to decide what kind of food you will make. Choose one foreign dish you want to try and introduce it to the class! (総合・創造)
発表、相互評価	自分の考えをグループで発表し、評価し合う。

## (2) パフォーマンステストの評価

単元の最後に話すことのパフォーマンステストを実施し、①生徒自身の意見・考えが明確に述べられているか、②聞き手に伝える工夫や論理性に注意して話しているかを評価する。なお、課題内容に影響される発話量や、パフォーマンステスト後に書くことの課題で評価する文法の正しさは本研究の分析対象とはしない。

## (3) マインドマップの分析

生徒の思考がどのように刺激されているかを可視化する方法として、マインドマップを作成させる。キーワードで構成されたマインドマップを見ながら話すことで、表現活動に対する生徒の抵抗感を減らすと同時に、活動に即興性を持たせる。また、話す活動は複数回繰り返すことから、マインドマップを修正する機会を設定し、意見・考えがどのように展開していったかを追う。

## (4) 生徒の意識調査

振り返りシートへの生徒の記述やアンケートへの回答を基に、話すことや英語学習に対する意識の変化を調査する。

## V 実践経過

### 1. 生徒の実態把握

#### (1) 英語学習に関する意識調査①

4月は生徒観察を行い、5月には生徒の実態を把握するため、英語学習に関する意識調査アンケートを実施した(表4)。

英語の授業における好きな活動として、17名中3名が話すこと[やり取り]を挙げた。その理由として「会話が楽しい」「ペアワークが楽しい」と述べており、英語で伝えることよりも、友達と話す楽しさを重視している。話すこと[発表]を好きな活動に挙げた生徒1名は「英語を話せることが面白い」と述べており、英語で伝える楽しさを感じている。一方、苦手な活動として話すことを挙げた生徒は10名であった。その理由として、「コミ

コミュニケーションが得意じゃない」「英語が出てこない」「何を言えばいいかわからない」「言うことを考えるのが面倒くさい」というものが挙がった。生徒の話す活動に対する苦手意識には、知識不足、安心感の欠如、意見・考えが持てないといった複数の要因があることがわかる。

表 4 英語学習に関する意識調査 5 月

	好き	苦手
聞く	6 名	2 名
読む	4 名	0 名
話す(やり取り)	3 名	3 名
話す(発表)	1 名	7 名
書く	3 名	5 名

## (2) 研究対象生徒の抽出

授業での生徒観察、アンケート結果、第 1 回中間考査の結果を基に、研究対象として 4 名の生徒を抽出した(表 5)。全ての生徒に共通するのは授業に対して前向きな姿勢で臨んでいることである。

表 5 抽出生徒の特徴

	生徒 A	生徒 B	生徒 C	生徒 D
英語	好き	普通	普通	苦手
学力	低	高	中	低
話すこと	苦手	普通	好き	苦手

生徒 A：真面目な生徒で意欲も高いが、覚えた単語の使い方がわからないと悩んでいる。題材に対して意見・考えは持っているが、日本語であってもそれを言語化するのに時間がかかる。

生徒 B：学力が高いが、授業で積極的に発言することはない。話す活動についても、与えられた課題を淡々とこなしている。

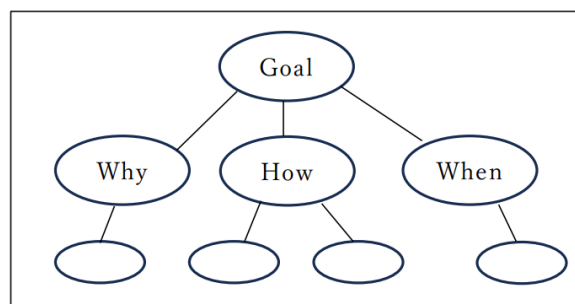
生徒 C：話すこと [やり取り] は好きで、相手に質問をして会話を続けようとする姿勢がみられる。しかし、話すこと [発表] は得意でない。

生徒 D：英語に対する苦手意識が強く、意見・考えが持てないと感じているが、明るく前向きな姿勢で授業に臨んでいる。

## (3) マインドマップ作成指導

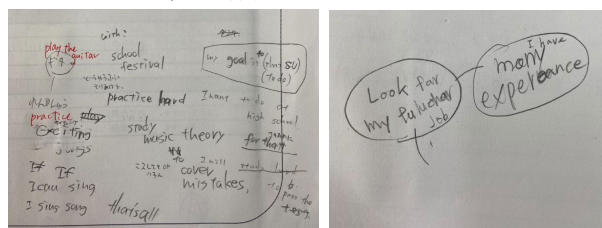
実践 I の前に、マインドマップを用いたスピーチに慣れるために、Lesson 1 では「高校で達成したいこと」というテーマで話す活動をおこなった。マインドマップのモデル(図 2)を示し、達成したい理由、手段、期間などについて考えを展開するよう助言した。更に、マインドマップを見ながらスピーチをしても良いこと、ペアでのスピーチ練習後にマインドマップの修正を行うことを伝えた。

図 2 生徒に示したマインドマップの例



中学校でマインドマップを使用したことがある生徒は多かったが、思いついた単語を並べただけのものや、目標のみを書いて、理由などを全く書かない生徒が多かった(図 3)。意見・考えを展開し、整理するために活用できているとは言えず、実践 I Lesson 2 ではマインドマップのモデルを提示するだけではなく、マインドマップ上で思考を展開していく過程を生徒と共有する必要があると感じた。

図 3 生徒が作成したマインドマップ



## 2. 実践 I 6 月

### Lesson2 "Curry Travels Around the World"

#### (1) 単元の目標

インドからイギリス、そして日本へと渡ってきたカレーの歴史を知ること、その文化的・社会的背景に興味・関心を持ち、伝統的な料理について情報や考えを伝え合うことができる。

## (2) 認知処理レベル別分類に基づく授業

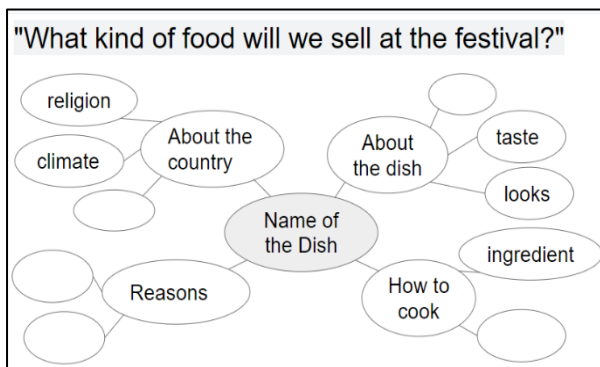
ワークシートの構成については、初めに「カレーという言葉を使い始めたのは誰」「スパイスがイギリスに持ち込まれたのはいつ頃」などのように、本文の内容について答える情報内思考を促す問いを投げかけることで内容への理解を深めた。その後、「海外で好まれる日本のカレー料理（応用）」「当時のインドとイギリスの関係性（分析）」「初めてカレーライスを食べた人はどんな反応をしただろう（総合・創造）」などの情報を越えた思考を促す問いで、生徒の意見・考えを引き出すことをねらった。

## (3) 単元のパフォーマンス課題

「学校祭で出店したい外国の料理を紹介する」（思考の分類：総合・創造）

学校祭で出店したい外国の料理の写真を示し、その料理の魅力や選んだ理由を伝える活動を行った。グループ内で発表後、最も学校祭に適した料理を選んだ。発表の前にはペアでの練習を2回行い、その都度スピーチの修正を行なっている。活動の前に教師がマインドマップ（図4）を用いてスピーチを行うことで、モデルを示した。

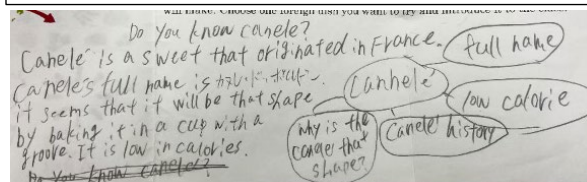
図4 生徒に示したマインドマップのモデル



以下は、抽出生徒の発表内容、マインドマップ、振り返りのコメントである。発表内容については、問いに対する意見を太字、意見の背景にある考えを下線、マインドマップに書かれていない語句を網掛けで示している。

## ① 生徒A

**I want to introduce a food, canele. Do you know canele? Canele is sweet that originated in France. Canele's full name is Cannelé de Bordeaux. It seems that it will be a shape by baking it in a cup with a...groves. It is low in calories. Thank you.**

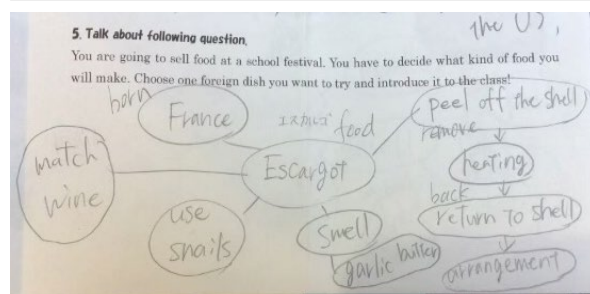


生徒の振り返り：美味しそうと言ってもらえてよかった。文で書くなと言われたけど、書いていないと話せない。

評価：マップの横に書かれた原稿を読むだけで、即興性に欠ける発表となった。また、内容はカヌレの説明のみで文化祭に薦める理由が述べられていない。ただ、マインドマップを見ると調べた情報をキーワードで並べた中に、「なぜこの形なのか」という疑問が挙げられており、カヌレについて興味が深まる様子が表れていた。

## ② 生徒B

**I'm introduce about escargot. It's...It was born in France. But it is eaten in Japan now. This food use snails. Snails in Japanese Katatsumuri. I will tell you what to make. First, peel off the shell. Second, heating. Third, back to shell. Finish. This food smells garlic butter. It much wine. Thank you.**



生徒の振り返り：エスカルゴは食べたことが

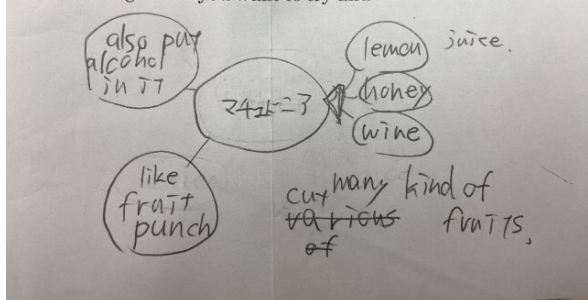


ないのですが、調べてみて食べたくなりました。選んだ理由をちゃんと見えませんでした。評価：エスカルゴを薦める理由は述べられていないが、聞く人に伝わりやすいように順を追って調理法を説明している。マインドマップの語句を使いながら、即興的に英文を作っているため、表現が練習ごとに異なっていた。最後の発表で snail は日本語でカタツムリであるという説明を加えて、内容を改善しようとしている。

### ③ 生徒 C

I introduce food is Macedonia. This is made Italy. This is like fruit punch. Cut many kinds of fruits, lemon juice, honey and white wine. That's all.

Use one foreign dish you want to try and introduce it to the class!

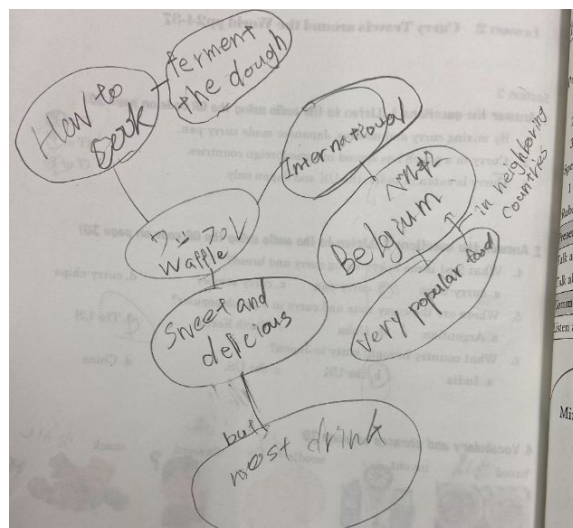


生徒の振り返り：選ばれなかったけど、結構うまく説明できたと思う。選んだ理由は面白そう以外特に思い浮かばなかった。

評価：マケドニアの短い説明のみで終わっていた。マケドニアについて調べ、マインドマップにキーワードを並べただけで思考の広がりは見られない。しかし、グループ内では“Tell me.” “Which is best?”など、英語を使って話し合いを進めようとしていた。英語で話そうとする姿勢は身に付いている。

### ④ 生徒 D

I want to introduce waffle. Waffle is sweet and delicious. But must drink. Waffle from Berugii. Berugii... Waffle is very popular food. Finish.



生徒の振り返り：うまくしゃべれませんでした。でも他の人の聞くのは面白かったです。〇〇君がいっぱい質問していてすごかった。評価：ワッフルについての説明が十分とは言えず、選んだ理由も述べられていない。マインドマップにはワッフルから連想される単語を並べただけで、何を伝えるべきかが定まっていなかったことがうかがえる。

### (4) 考察

情報内思考を促す問いでは、抽出生徒4名全員が本文の内容や表現を基に正しく答えることができた。

情報を越えた思考を促す問いについては、自分の知識を基に意見・考えを述べようとしていた。例えば「当時のイギリスとインドの関係は？(分析)」という問いに対して、歴史で学んだことを基に、生徒 B は“The UK colonize India. So spices are transmitted.”と答え、生徒 A、C、D は“Colony.”や“Because colony.”と答えた。生徒 D のように英語に苦手意識がある生徒も、何とかして自分の知っていることを伝えようとしていた。このことから、情報を越えた思考を促す問いには、生徒の英語力に関わらず、意見・考えの表出を促す一定の効果があると考えられる。

単元のパフォーマンス課題では、全員が教科書の内容や表現を参考にして、料理の発祥、歴史、作り方を述べていた。しかし、学校祭

の出店に適していると考えた理由を明確に述べた生徒はおらず、発表後の質問に答える形で理由を述べる生徒もいた。これについては様々な原因が考えられる。生徒Aは考えていることを言葉にすることが苦手で、マインドマップ作成のための10分のうち、5分は何も書くことができず、ペアでの練習をしながら書きこみを続けていたが、理由を述べるには至らなかった。生徒Cは「料理の説明が意見・考えのつもりだった」と述べており、意見・考えがどのようなものかをイメージできていない。生徒Dは情報を収集し、整理することに時間をかけ過ぎていた。

### (5) 課題

生徒Bのように、理由を述べなかったことを自覚し、振り返りで触れる生徒も数名いた。この気づきを全体で共有するとともに、情報を越えた思考を促す問いによって意見・考えを述べる活動を繰り返していく必要がある。

マインドマップについては、キーワードではなく、文を書き込む生徒が生徒Aを含めて5名おり、原稿を読む即興性の低い活動となってしまった。マインドマップの活用方法について改めて指導するとともに、誤りを恐れず自分の意見・考えを伝えられるよう生徒の不安感を取り除いていかなければならない。

## 3. 実践Ⅱ 7月

### Lesson 3 “School Uniforms”

#### (1) 単元の見目標

各国の制服を通してその背景にある文化の違いを知り、学んだことを基に自分たちの学校の校則に関する考えを伝えることができる。

#### (2) 認知処理レベル別分類に基づく授業

情報内思考を促す問いとして、「制服が好きだと答えた生徒は何割か」「アメリカの学校で重視されていることは？」などを投げかけ、高校の制服を通して見える文化の違いを理解させた。その後、情報を越えた思考を促す問いとして、「どの国の制服を着てみたいか」(解釈)、「国によって制服が異なるのは何故か？」

(応用)、「高校生に帰属意識は必要か？」(分析)など、生徒の好みや経験を基に考えさせたり、本文の内容から推測させたりした。

### (3) 単元のパフォーマンス課題

「学校の校則に賛成か反対を述べる」(思考の分類：評価)

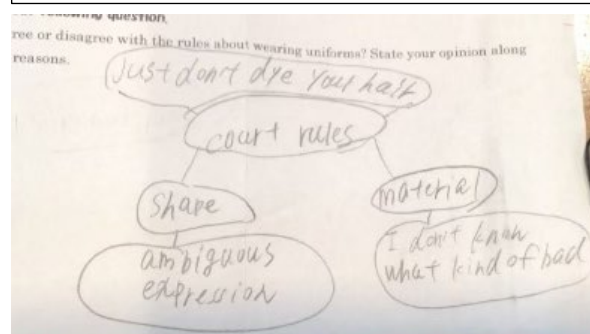
身だしなみに関する校則について、それぞれの意見を述べるという課題に取り組んだ。

実際に校則に関するアンケート調査が10月に実施される予定であったため、生徒指導課の教師を聞き手としてイメージし、相手が納得するような理由や根拠を述べるよう指示した。生徒には校則が英語で書かれたものを与えた。

以下は、抽出生徒の発表内容、マインドマップ、授業の振り返りコメントである。

#### ① 生徒A

**I don't agree with that. I don't think there is a problem with the length of the hair as long as it doesn't gets in the way of your eyes... eyes. And I think it is OK if it doesn't look weird like vivid hair.**



生徒の振り返り：自分の考えを言えたと思うが完璧ではなかった。言いたいことを言葉にするのが難しい。

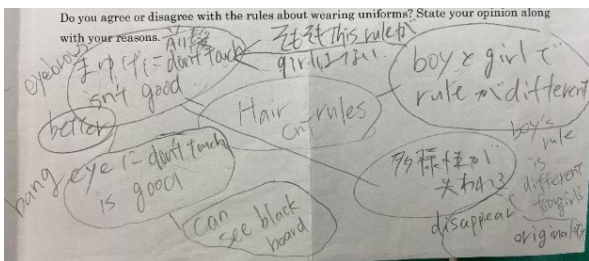
評価：内容は前髪の長さを規定する校則に反対するものである。「前髪の長さは目にかからなければ問題ない、見た目が奇抜でなければ構わない」という主張は、校則に反対する根拠としては客観性に欠けるが、自分の考えを述べようとしていた。

マインドマップには髪の色と上着について書かれており、スピーチ内容とは異なる。何

を話すべきかを決めかねて、マインドマップとは別に書いた原稿を使って発表していた。

## ② 生徒B

**I think hair cut rule is not good. Boys must have bungs do not touch the eyebrows. This rule is not good. I have two reasons. First, ... don't touch eyes is better than don't touch eyebrows. Because students can see black board. Second rule ... second reason is boy's rule is different from girls rules. Girl's rule don't have this rule, so this is not fair.**

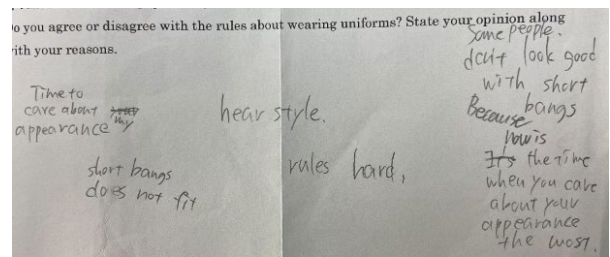


生徒の振り返り：うまくできたと思うが、マインドマップを見ながら文を作っているので、文法が変だった。

評価：前髪の長さを眉毛までとする基準を変えるべきだと考える理由として、目にかからなければ「黒板が見える」ことを挙げ、男女で基準に違いがあることの不公平さも指摘した。校則についての自分の意見・考えを伝えることができています。マインドマップには教科書で学んだ「多様性」や「originality」といった表現が入っており、本文の内容を参考にしながら自分の考えを展開しようとしている。

## ③ 生徒C

**I want to change bangs rule. Because some people don't look good with short bangs because now is the time when you care about your appearance the most. I think cool looking is important for high school student.**

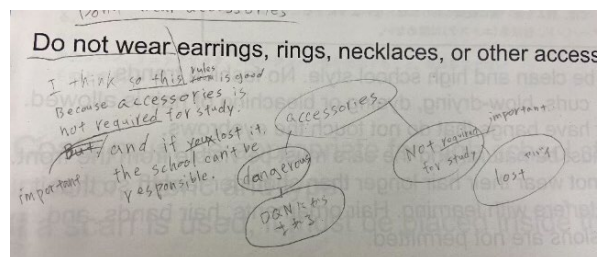


生徒の振り返り：反対する理由はあるけど、それをうまく言えなかった。もっと相手が納得するような理由を言いたかった。

評価：客観性に乏しく、説得力に欠ける主張ではあるが、校則に反対する理由を述べようとしていた。マインドマップは思い浮かんだことを書き出しているだけだが、「厳しいルール」「容姿を気にする時期」「短い前髪は似合わない」という記述があり、自分の意見・考えを整理しようとしている。

## ④ 生徒D

**I talk about accessory rule. I think this rule is good because accessory is not important for study. And if lost it, the school can't be responsible it.**



生徒の振り返り：うまくできたと思う。自分の意見をちゃんとマインドマップに書いて伝えたから。日本語で考えたことを英語にするのが一番難しい。

評価：短い内容ではあるが、アクセサリ禁止のルールを認める理由を述べる事ができている。ペアからの「なぜ必要ないのか」という質問を受けて、紛失する恐れがあることを付け加えていた。ペアを変えてスピーチを何度か繰り返す中で、思考を深めていることがわかる。

## (4) 考察

「高校生に帰属意識は必要か」という問いに対して抽出生徒は4名とも「必要である」



と答えた。生徒Cはその理由を答えることができなかつたが、生徒Aは“**It is useful to learn about society.**”、生徒Bは“**This is because high school students have to learn about society.**”、生徒Dは“**Because switch private and school life.**”と、制服にはそれぞれ国の文化的・社会的背景が反映されていることを知り、帰属意識の重要性について自分の言葉で述べることができた。

単元のパフォーマンス課題については、抽出生徒4名全員が校則に関する自分の意見を理由とともに述べようとしていた。様々な思考レベル別の問いを繰り返し与え、説得力のある内容を目指すことを条件として提示したことで、意見・考えを述べようとする意識を持つ生徒が増えてきた。

#### **(5) 課題**

##### ①思考分類に基づく問いの設定

本研究では、問いの認知処理レベルを徐々に高めることが、生徒の意見・考えの表出にどのような効果をもたらすかを明らかにすることを目的としているが、題材によっては各レベルの問いを設定することが難しいうえ、生徒の題材への理解の度合いに応じて適切な問いの設定ができなくなる恐れがある。そこで、実践Ⅲではレベルを徐々に上げるのではなく、題材や生徒の習熟度に適した問いを設定し、その問いがどの思考レベルにあたるかを確認していくこととする。

##### ②課題の設定について

単元パフォーマンス課題では、意見・考えを伝える目的や場面、状況が明確でなかったため、主張を絞ることができず、マインドマップの作成に手間取る生徒が見られた。校則見直しのための意見交換の場など、生徒がイメージしやすい状況を設定するべきであった。

##### ③マインドマップの活用

発表後の感想として、生徒A、Cは日本語であっても考えを言葉にするのが難しいと述べている。作成したマインドマップは、思い

浮かんだ言葉を書き出しただけで、思考を展開させているとは言えない。イメージを色分けして表現する、連想したキーワードを放射状に展開させる、話す順番を数字で書き込むなど、マインドマップをより効果的に活用するための指導を継続していく。

#### **(5) 英語学習に関する意識調査②**

単元終了後に英語学習に対する意識調査を行った。「話す(やり取り)」「話す(発表)」を好きな活動に挙げた生徒は5月の23%から28%に増加。苦手な活動に挙げた生徒は58%から50%に減少した。苦手な理由として、第1回では「人前で話すことが苦手」「緊張する」などのように、話すという状況を苦手と感じている生徒が多かったが、第2回は「日本語ではまとめられるが、英語にするのが難しい」「頭の中にあることをどうやって言えばいいのか分からない」「単語をどうやって使えばよいか分からない」という理由が多かった。意見・考えを伝えることの難しさや自らが獲得した知識・技能に着目する生徒が増えてきた。このことから、思考を促す指導を通して、意見・考えの持ち方や、それを相手に伝えようとする姿勢が生徒に身に付いてきたことが分かる。

#### **4. 実践Ⅲ 10月**

##### **Lesson 5 “Bailey the Facility Dog”**

##### **(1) 単元の目標**

ファシリティドッグの導入という意外なアイデアが大きな効果を生み出すことや、他者のために働く喜びについて学び、高校生活をより快適なものにするアイデアを提案することができる。

##### **(2) 認知処理レベル別分類に基づく授業**

情報内思考を促す問いとして、「ベイリーは子供たちに何を教えたか」、「言葉が話せない少年にどのような変化が起こったか」、「オキシトシンとは何か」、「ファシリティドッグの導入にはどのような問題があるか」などを与えて、本文内容への理解を深めた。

情報を越えた思考を促すために、「今後ファシリテッドッグを導入する病院は増えるか」(応用)、「ファシリテッドッグの導入にスタッフが懐疑的であった理由」(分析)、「自分の体内でオキシトシンが分泌されそうな場面は」(総合・創造)などの問いを設定した。生徒たちはファシリテッドッグについて学んだことを活かして、取り組みの先行きを予測、問題の原因を分析、自分と関連づけてどのような効果があるかを想像する。これによって、単元のパフォーマンス課題で独自の提案をするために必要な思考を促す。

### (3) 単元のパフォーマンス課題

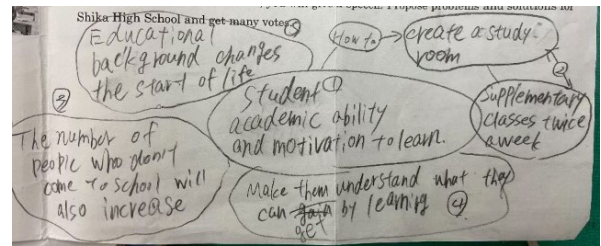
「生徒会役員選挙の演説で、学校生活をより快適なものにする方法を提案する」(思考の分類：提案)

生徒会役員選挙で、学校生活をより良いものにするためのアイデアを提案するという課題である。学校の課題を見つけ、それを解決する独自のアイデアを提案し、実現するための具体的な方策を述べるよう求めた。

以下は、抽出生徒の発表内容、マインドマップ、生徒自身が4月からの変化を振り返ったコメントである。

#### ①生徒A

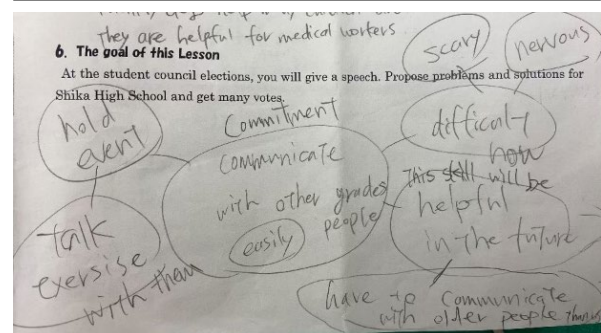
I am ○○, a candidate for president of the student council.  
When I become student council president, **I will prove students' academic ability and motivation to learn.** I thought of two methods. **For example, first, create a study room. Second, supplement classes twice a week. But I thought problem. A lot of students don't come to this school. So, make them understand what can get by learning.** A lot of students. **Finish.**



生徒の振り返り：4月と比べて、利用できる単語の量が圧倒的に増えた。文法は発展途上ではあるものの、かなり相手に伝わるように話すことができるようになった。自分の意見を言う機会が多かったからだと感じている。評価：生徒の学力や学習意欲を向上させるための具体的な方策を挙げ、欠席する生徒が多いというクラスの学校の課題を解決する方法についても触れている。発表では、以前に比べてマインドマップを見る回数が減り、表現についても文と文の間をつないで自然な流れにしようと考えながら話していた。

#### ⑤ 生徒B

I am ○○, a candidate for president of the student council.  
When I become student council president, **I will change communicate with other grades people easily. It is difficult for students to communicate with people, because it is scary or nervous. But this skill will be helpful in the future. So, I will hold event such as talking event or exercise event.**  
If you agree with me, please vote for me!  
Thank you.



生徒の振り返り：話すことは以前からそんなに苦手ではないが、教科書で学んだことは話す際の語彙の幅を広げてくれるし、それを使



かし、ほとんどの生徒が難なく答えることができていたことから、実践Ⅲでは情報内思考を求める問いを減らした。情報外思考を求める問いに割く時間を増やした。それによって、情報外思考に取り組み、意見・考えを整理する時間を生徒により長く与えることができた。

実践Ⅰ以前は、日本語であっても上手く自分の意見・考えを述べることができない生徒が多かったが、様々な認知処理のレベルの問いに答えることで、思考を整理する手順が身に付いてきた。発表後の振り返りでは、抽出生徒4名全員が意見・考えを述べる力が身に付いてきたことを実感している。話す活動において思考を重視する問いを投げかけ続けたことで、文法の正しさに過度に縛られて表現することを躊躇することもなくなってきた。

また、意見・考えを述べる際に、結論だけを述べるのではなく、具体例や根拠を示すことができるようになってきた。生徒Cが他の生徒とのやり取りを通じて「自分の意見を言いたいと思えるようになった」と述べていることから、他者を意識し、より説得力のある発言をしようという意識が芽生えてきたことがわかる。

## 5. 生徒の意識調査（11月）の結果

実践Ⅲ終了時に生徒17名に意識調査アンケートを記述形式で実施し、抽出生徒については追加で記述式質問を行った。以下がその内容である。

### （1）「話すこと」への意識の変化

（質問）話すことについて4月から意識の変化はありましたか。

（回答）

【変わらず苦手】3名

- ・言葉が出てこない、難しい。
- ・たくさん話すことができない。

【変わらず得意】3名

- ・前から話すのは好きだった。
- ・使える表現は増えているけど、意識は変わらない。

【変化があった】11名

#### ① 伝え方についての変化

- ・発音を意識するようになった。
- ・相手に伝わるよう意識するようになった。

#### ② 苦手意識や不安感の軽減

- ・英語がわからなくて不安だったけど、その不安が減った。
- ・話すことに慣れてきた気がする。
- ・前よりは緊張せず楽しめるようになった。

#### ③ 意見・考えの表出

- ・自分が伝えたいことをある程度言えるようになった。
- ・理由が言えるように気をつけている。
- ・自分で考えて話せるようになった。

### （2）思考を促す活動について

（質問）題材について様々な問いに答えることは意見・考えを述べるのに役立ちましたか。

（回答）

【わからない】1名

【役に立った】16名

- ・教科書の内容とか表現を引用して自分の意見・考えを言えたから。
- ・調べたことから考えて、自分の意見を言う力が少し付いた。
- ・意見を持つことを大切にするようになった。
- ・周りの人の意見も参考にできたから。
- ・質問に答えることにすごく慣れたと思う。
- ・教科書で知ったことを使ってみて、役に立つと思えたから。

（質問）マインド・マップを書くことは意見・考えを述べるのに役に立ちましたか。

【役に立たなかった】2名

- ・まだあまり上手く書けないのでわからない。

【役に立った】15名

- ・考えをまとめるのに役に立った。
- ・意見をいっぱい出せた。
- ・マップを書くとどんどん考えが広がる。
- ・一番伝えたいことを中心に広げていくと、意見が言いやすかった。



- ・マインドマップを使うと自分の考えを言葉にできた。

### (3) 意見・考えを述べる活動について

(質問) 意見・考えを述べる力は向上したと感じますか。

(回答)

【向上したと感じる】17名

- ・ワークシートの質問に答えられるようになってきたから。
- ・文法がわからなくて意見や考えを言うのが嫌だったけど、今は正しい文法を気にして会話できていると思うから。
- ・自分の意見を持って文で言えている。
- ・単語が分からない時に似た意味の単語でできるだけ英語で言っている。
- ・授業で習った文法を使って意見を言えるようになってきていると思う。

### (4) 意識調査に見る抽出生徒の変化

話すことに対する抽出生徒の意識調査と追加質問への回答から、その変化を分析する。

生徒A

5月の意識調査では、知識不足と意見・考えを言葉にする能力に欠けることから、「英語は好きだが話すことは苦手」と述べていた。真面目で学習意欲も高く、積極的な姿勢で授業に取り組んできた。11月の調査では、「話すことを楽しめるようになった」と答えており、その理由として「教科書で学んだ表現や内容を使って答える質問が多かったので、話す内容が豊かになった」と述べている。

マインドマップの活用については、「自分の考え方はマインドマップと逆で、細かいイメージとは情報をまとめて最後に大きな答えにたどり着くので、書くのに苦戦した」と答えている。

生徒B

学力が高く、5月の時点で話すことに対する苦手意識はなかった。11月の調査でもその意識に変化はない。自身の取り組みを振り返って、「教科書で学んだ表現とかは話す時の語

彙の幅を広げてくれた。自分は言いたいことを日本語で考えてから、話す時に英語にしているので、知っている単語やフレーズを思い出す良い機会になっている。英語の知識が増えたことと、質問に答えることに慣れてきたおかげで英検の面接でも言いたいことが言えた。」とその変化を自覚している。

生徒C

5月の調査では英語学習や話すことに対して「普通」と答えた。11月の調査では「相手に伝えることを意識するようになったし、周りの人の意見を聞くことも参考になった。自分の意見を言う時に、教科書の使えそうな文法を確認していたので、使える表現は増えた。」と自身の変化を振り返った。マインドマップについては「まだうまく書けないから効果があるかはわからない。」と答えている。

生徒D

4月の調査で、英語学習も話すことも苦手であると答えた。調査では下位層であるが、コミュニケーションを積極的に取ろうとする姿勢が身に付いている。11月の調査では「自分で考えて話すことができるようになった」と変化を実感しており、語彙や文法についても「自分で考えて使うから覚えやすい。前より本文の内容が分かるようになったし、話し合いもできるようになった。」と述べている。

### (5) 意識調査の考察

思考分類に基づく授業を実施した結果、17名中11名が話すことに対する意識が向上したと答えた。また、17名全員が意見・考えを述べる力が伸びたと感じている。

抽出生徒は、表現の豊かさに差はあるが、認知処理レベルの低い問いに対して自分の意見・考えを述べることができている。単元のパフォーマンス課題では、意見・考えを整理し、それを言語化することに慣れてきていることが振り返りシートからわかる。

生徒Aは、実践を通してマインドマップ作成を難しいと感じており、特に実践Iでは制

限時間内にマインドマップを書き終えることができなかつた上、話す活動では書いた英文を読むだけであつた。また、「〇〇みたいなのが言いたいのですが、どう言えばいいですか。」という質問が多く、自分の考えを言葉にすることに苦戦していた。しかし、実践を重ねるうちに意見・考えを言葉にすることに慣れ、実践Ⅲでは、認知処理レベルの低い問いに即座に答えることができ、単元のパフォーマンス課題でも制限時間内にマインドマップを作成し終えることができた。マインドマップに文を書き込んではいるが、自分の思考の流れを整理しようとしていた。

生徒 B は、実践Ⅰの時点で聞き手を意識しながら話すことができていたが、実践を重ねるにつれ、論理性に注意しながら伝えられるようになってきた。マインドマップを活用して思考を展開するなど、意見・考えを述べる手順が身に付いてきている。

生徒 C の実践Ⅰでのスピーチは、調べた情報を英語で伝えるだけであつたが、実践Ⅱ・Ⅲでは理由を述べることができた。内容は論理性に欠けるが、意識調査の回答から意見・考えを述べる意識を持っていることが分かる。マインドマップについても、思考を展開しているとは言えないが、様々な書き込みから考えを整理しようと試行錯誤していることが分かる。

生徒 D は生徒 C と同様に、実践を重ねるにつれ、徐々に意見・考えを述べるできるようになってきた。実践Ⅰ、Ⅱのマインドマップは、調べたことを並べただけであつたり、原稿を書いたりしていたが、実践Ⅲでは書き込んだキーワードを頼りに考えながら、聞き手の顔を見て話すことができていた。

## Ⅵ 考察

### 1. 思考分類に基づく授業モデル

#### (1) 思考分類に基づく問い

実践Ⅰ、Ⅱでは、思考を促す問いの認知処

理レベルを徐々に上げることで、生徒がより複雑な思考に適応することを期待していたが、それに固執することで、題材や表現に対する生徒の理解に寄り添うことがおざなりになる可能性があると感じた。そこで、実践Ⅲでは認知処理レベルを辿るのではなく、題材や生徒の理解の深まりに応じた認知処理レベルの問いを設定することとした。

今回の実践を経て、筆者の過去の指導において生徒が意見・考えを述べられなかつたのは、生徒の理解が十分でないうちに認知処理レベルの高い⑥総合・創造や⑦評価の思考を求めたことが原因であつたと推測できる。

認知処理レベルの低い思考を促す問いで、生徒の意見・考えを即座に述べる力を伸ばし、意見・考えを述べることに慣れさせる。その後、認知処理レベルの高い思考を促す問いでは、意見・考えを深め充実した内容の話す活動を行なつた。様々な認知処理レベルの思考を促すことで、生徒たちの意見・考えを述べる姿勢を育むことができたと考える。

### (2) 単元のパフォーマンス課題

単元のパフォーマンス課題についても、思考分類を基にその達成までに生徒にどのような思考を求めるかをイメージして授業デザインを行うことができた。例えば、実践Ⅲの課題を「学校生活をより快適なものにする方法の提案」とし、論理性に注意して、より良い提案ができるよう、ワークシートの問いでは「取組の先行きを予測」、「問題の原因を分析」、「自分と関連づけてどのような効果があるかを想像する」といった思考を促した。

思考の分類を取り入れることで、活動を活性化させるためのより効果的な単元デザインを行うことができると考える。

## 2. 意見・考えの表出を促す効果

### (1) 話すことへの意識の変化

5月の意識調査では、話すことが苦手であると答えた生徒は10名であつたが、そのうち7名が、意識が変化したと答えた。その理

由として、7名のうち5名が苦手意識や話すことへの不安感が軽減したことを挙げた。表現の正しさに注意を払うあまり誤りを恐れて話すことができなかつた生徒にとって、意見・考えを伝えることを目的とした活動は、「文法が間違っている、とにかく伝える」という意識を持つきっかけとなった。

話すことへの意識の変化が英語学習そのものに対する意識の変化にも繋がっている。本研究においては、表現の正しさを評価の対象としていないが、「自分の意見・考えを伝えたい」「話したり、人の意見を聞いたりすることが楽しい」と考える生徒が増え、話すことへの意識が変化していった。その結果、実践Ⅲ終了後の調査では、17名中11名が、意見・考えを述べる活動を通して「発音や文法の正しさを意識するようになった」「学んだ表現を積極的に使用している」と答えた。

## (2) 思考の可視化

生徒が意見・考えを述べることができない原因を明らかにするため、マインドマップで思考を可視化することをねらった。マインドマップを分析することで、生徒の思考の流れを把握し、何に躓いているのかを見取ることができると考えたからである。それによって、意見・考えを持つことができない生徒、言語化できない生徒、論理性に欠ける生徒など、それぞれが抱える問題を特定し指導に活かすことができた。

生徒自身もマインドマップによって自分の意見・考えが十分に整理されていないことを自覚し、修正を重ねることでより良い発表をしようと努力していた。

現時点では、マインドマップの本来の目的である思考を展開させるための活用ができていたとは言えない。今後もマインドマップの使用を継続することで、論理性に注意して意見・考えを伝える力を育成していきたい。

## 引用文献・参考文献

- 1) Waters, A.(2006).Thinking and language learning. ELT Journal,60,319-327
- 2) 大下邦幸(2014)『意見・考え重視の視点からの英語授業改革』東京書籍株式会社
- 3) 大下邦幸(2009)『意見・考え重視の英語授業 コミュニケーション能力育成へのアプローチ』高陵社書店